# 奉使日本紀行

十六之十八

止

特別
ル2
3138
6

奉使日本紀行

第十六篇

第十七篇

第十八篇

北徼小誌 旁捜 巻第廿八

# 奉使日本紀行

青地盈譯
高橋景保校

第十六篇　アニロ湾を出カムサツカ着

第五月十六日　晩朝六時南差南東の風にてサルヘ一イを出帆するに潮勢舶を漕きに宜しかりし小筭九時に風南に吹正午の比に風愈強く来て帆名マルス帆を縮めたり　晝後四時に風緩く空晴てアニロ湾

門 2
號 3138
卷 6
早稲田大學圖書館
昭和30.6.17
藏書

北東側ハ僅の雜木連とも審にミえ候アニワ岬の周り
山を亘る處也なり 地景にビラミテと名く礁も全く
見すタ八時アニワ岬を回り夜中風なに當り下け
暁にあり アニワ岬を北東ニ見北に見て針路を之に
向ふと直ニ又宗谷海峡ニかゝり上を得す漫然下りぬ
此時半ニ一又針路を陸に向け居く帆を治て廿
里なり
アニワ岬ハ三百山の連りにて北に見えたるを以て見著し

とまアニワ岬と三百山の間に低處有りて鞍のやうな形
をなす岬ハ缺山崩也三百峭壁の礁中にして其頂り
海か洞のり我船此岬より五里八里の離に通りとなり
危険のとなりし也岬を北と北乃至北東に見なし不の
海の深さハ七十尋乃至五尋ケレイの底なり大陥の如き
前少し此岬の緯ハ両日見て數ゝ測量し我東
二度に在西ハ略十七其経ハ最　細に之を測りし時觀
望も捗行し又カムサツカにし着の後ドクトルホルナルの

極正と比較をして我時規の差日毎にますカムサツカ此間
にて其差甚僅にて其日僅に六秒なりし其後算定し
て アニワ湾ハ北緯四十六度二分二十秒西経二百十
六度二十九分四十秒とす
ラペロウセの為にハ此岬緯四十六度三分経二百十五
五度三十六分タゲレト此較正に経二百十六度三十一分十
六秒とす此にてハ僅に一分半を我と差ふ
船をアニワ岬の子午規に置さるに風静なる事二十四時の

間唯時々徐風の起より東北に正午にアニワ岬ハ船北
南西八十一度にて在他の一岬我始めトナイ岬と誤りしに
者ハ北西三十度に在此岬ハ我友笑那瑪尓加船官ロ
ウユレヲルンに名を命す此岬より バチーンセ湾の西側に北
差北東に錯海濱ハ峭壁と殆と高き樹木の掩ふ山あり
更に変て海門なく唯に湾の口開さるあり韃靼の瀬戸
ヨフンクレ湾に於るが如し又ロウスレヲルン岬の北に一岬ありて
ロウエンヲルン岬と東北に對してロウエンヲルン岬ハ北緯四十

六度二十三分十秒とし　アニワ岬の東十里ニして西経二
百十六度二十分〇〇とす　此岬ハ極て高き嶋の嶺崧ニ
して他の雄たちより我別つへし　此より其嶺ハ西に向て例
の如く一連の山嶺ニ沿りて終に彼此ニ雪を掩ふ此辺の海
ニは鯨と海狗夥しく人ニ驚さるゝことなきと見へて船の
周囲ニ浮み游ぶ　夕方ニ至ニ一舟ニ六人乗て陸の方より漕出
我船ニ向ひ来るニ因り其詳の事を知りて暫く留り終り
引返し去ぬ　夜ニ入て速く洋中ニ出る惮るものなく小船

爰は海深六十五尋ニして底ハ砂なり　羅針ハアニワ湾ニ
ては一度十一分北東ニ傾き　トバナンき湾口ニては一度甲
三分北東傾　但一度北ニ傾き復一度零一分北西
と事如此羅盤のたえす動揺ありては我羅盤ニ関る
事有験　長崎よりバナーンセ岬の東ニ至まて戉一二
度東ニ傾き復再ひ速ニ西ニ傾くを常ニ見たり之
第五月十八日爾後南西の風ニ我針路を北西ニ転し北ニ
指東ニ来る出崎此ニ向ふニ此地ハ北西ニ直ニ赴る

北西の後ろ当て頂円き山嶺あり又其北に雪を擁する
高山も（凡九行空）

トネイン岬より北に一連りの礁巖並ひたり此湾口は好
碇場なりと見ゆ然とも南に入て深く海底も此より好何
互へしと思ひ船を示す下トネイン岬の礁を一里半許
も遊（避）て リユイテナント、コッツエフ哉小舟に装し湾の内より
来る我船は湾口に未だ据り居るにトネイン岬の東は海
底礁悪にて甚地はケレイ此底なり第一時にゴロウ
ニン返りて来て玄湾中も總て礁地なりと但湾の北

側ハ其地低く好漁場何ら人を難し又清水ハ處
處ニ多く薪木も南北の谷ニ多し又濱上ニ数多家
何を見ス言ゲ多ハ空ニして人家唯婦人小児六七裁
見へつ彼等ハ我等を見て逃去るもなく又驚懼
もこの清ゴロワツラ陸ニ上り常達ハ彼家より男一人
許来る是ハ其家の主と見えゴロワツフ此前ニ跪き十
一ミユニートおとの内ニ彼ニ言ひ又ハ其彼等を当て
數て坐を請ひたりと其ハ彼ハ全海物の波取る其

下に在は細かる木綿を着し帯一隨ふと清楚ニ見え蝦夷
此地揭及アニワ湾のアイノよりも好見えさらく此處ハ
相製もらるき地頭もなくて其生産ニ優なりと見
る其婦女の容貌も前の者ニ勝り顔色も白く甚だ
何しきく業もなき(さ)よと見而其外邢様風俗ハ全アニワ
及ロマンクツフの土人ニ同し詞もゴロワノユラク教言我記
返りさるをレサノフ此アニワニて集め記したるを抄抜
せるニ同し詞之き其業とする所魚を捕り海物及

ゼーレーウを獵するに在とぞ其ハ等の骨髄
外残り有事する小海獣皮及油を取てアニワに在日本
人に賣与ふ所とし此よりタマリイアニワへ二十里卅
ルムバーイへ三十五里許りとす其家具ハ皆日本製にて水
を飲む器ハ漆塗にて有しと此湾を舶将モルドイン
フ此名を取命す北緯四十六度四十八分〇〇西経二百
四十六度〇〇とす ト子イ岬ハ四十六度五十分〇〇二百十
六度二十七分〇〇なり

昼後二時小舟を揚て帆を盡く張て彼北岸西に直
る濱の筋に舶を向けるにモルドイノフ湾の北部の外
に山より續く濱の形雪に埋もれり其界に高き峠有
印此を舶将シシアヒンの名に取てシシアヒン岬とす緯四十七
度十六分三十秒経二百十七度〇〇三十秒とす此岬より
至濱低く西に傾き一連の山東西より北東に亘る有て
至濱ハ小に向ふ所其ハ要子は海門に阿乃んと思ひ其地に
舶を寄る五里許の距に當る多く阿りといへとも崖に其涯

さし見るに元地に別る事なく唯潤く浅き海湾にして其海
低き地面側に山有間より一大河の流れ有且七月時
分に至り風南東にかわり船を東に差北東に遣り海添甲
尋ましてケレイ北感ある所に至る我針路陸より離
るに從て或ハ深く或浅く程能邑に地方より十六里
を距五十七尋に到り東に遠く連れる山の南西端ハ南西より
北東に入大谷に横たる在り是阿蘭陀人の名くる所
ベンベルグなるへしと思ふ此山ハ頂圓く緯四十七度三十三

分經二百十七度四十分とし其地西なる山続きの端は
緯四十七度四十三分とす阿蘭陀人名けてハスベンベルグ
と緯四十七度四十分に置サカリンの緯四十七度半とし
三十里に逼まと為述は即ち名ふに此山続きの最高き頂
ハスベンベルクにしてデベロウセ北ベルニシト岸と名くハ即ち之なる
デベロウセの端に其山峯を北緯四十七度二十五分ゲーレン
イク北西經二百十七度三十八分四十秒とす是ダゲント
北投るる表子綴ふな里

翌五日第八五月二十日 空晴 風阿速は再船を地方に寄
第六時ニスペンペルグ抜南西ニ見北西差北ニ当ル崎
地ところ第八時許ニ至く五里許なり即此をニコロフスキ
イ岬と名く北緯四十七度五十七分甲五秒西経二百
七度十三分〇〇と云其湊ハ北差東ニ向へ里
此甲比丹「ニコロフスキイ」は今を去十八年前第八一の船将
として實に其賢明多き人ニて有りし々此年ニて戦ニ
命を失へ里 即千七百八十九年 寛政元年第七月十七日

ボルンホルム 地名 地北戦ニ七十四門の砲を具する船名ミスケ
スロフ 我将として行年二十七歳ニて終る即ち殊其不
幸を悲歎すとなり

此地ハ總て高山嶺ニて其間ニ深谷有り湊ハ除患の礁石
なり船此湊と同じく御東岸のニて相距五里ニして海深
三十尋より四十五尋底ハケレイ之碓間の處ミニ船を
容るへき洞有り繋擒とするに宜からん々風強して
即く湊ニ向ひ難く然とも其處を兼して見ゆるニ最深き

雖同緯四十八度十分ニ在ると測ぬ此地の景色は
日本を出て南方ニ見し所より甚好爽ニて其ハ又江
に白色の雖の濱つき中等の高　諸般の山嶺及て
く青色ニして濱の後背樹林の谷ハ河　實ニサカリン中の
勝情の地と覚ゆ然ニし其後サガリンの中部及北部
ニもこゝ迄ハ行かさりしと沿
陸地ハ深く壁ハ連峯数行ニ南北ニ而直し其総の一
盖の嶺は　サカリン南部の山脊なるへしと覚ゆ山

頂雪ニ掩ひ雲ニ緯ゆ第十一時其地の北端を見んと
船を進るに其岬ハ一高山ニして南北ニ百丁の峭峙して
濱ニ臨む其峯ニ時立乞る山所見此より北ニ十一里
或十町を距て又一高山有りて特峙せり此内高山
北方の濱ハ甚低し岬ハ北緯四十八度二十五分〇〇西経一
百十七度十分〇〇と定む此岬を諸尼利亜の有名海
誌の作者北名を取てタルリイムアレ岬とす我船を北
端ニ進む時此岬我より北差東ニ在此時北走南ニ又

一山甚大ならざれども形著しく平地より起て立様を
切りたるが如し　此山ハ緯四十八度十五分○○とす　此昼夜船をとま
招り翌朝第五月二十一日に至るも船の進むを八僅に
風ハ不断東北東北東ならず其甚だしからずと船を遣ぬ此
時空曇り雪を催さんとせしが夕に至り果して雪
降りぬ　テルモソトテル北北水銀ちゞまりて氷の點に降る」
晝後第四時タルリイムブン岬ハ我西に見ゆ　其濱ハ北に向ひ
夜中ハ船を風下に流さしむ　地方を距る十里許まで海深三

十尋有り　翌朝より此湾の終るを見ばやとせしも一切葉陀
人の意に従ハず　ハチーシセ大湾の界に至るとす　胡第四
時盡く帆を張て船を陸の方に寄せ高き源から
東に向ふて之を走らす　高き地有り是等も亦見
し所にて北東北西に当り　一島有りと云ふ　北岬の濱ハ
西に徹る　北緯四十八度五十二分三十秒　西経二百十六度
五十八分三十秒とす　翌朝此を伯爵大帝の印度の名代
取シーモノフ岬と名く　第十時に終に北東に高き處

嶺下の地を見るに是ハコッパチノシセ大湾の隅々まで尽きぬと見え
海の涯漸々に減しぬ午正の測ハ北緯四十八度五十九分
二十一秒西経二百十六度五十一分とす海涯十八尋にて底ハ緑
色ノ石なり然とも此にて此地方を見るに未た通行
出へき海峡を得へからす即此に考るに此にてハ甲比丹フリース
は誤りて此海湾の絶まて巡覧せしにハ非るへし其著す所の経
度の差と海の深さも唯二十二尋すと記せるを見て知へし彼も此
我等一先いまより去るハ第二時過にて南にて低き地平中て

樹林茂りたる須北甚北西より東甚北東に巡るを見る陸
漸々に高く雪山嶺有り唯一度ばかりにて北に甚高き嶺を見る
即北甚西に針路を向ひ陸を距五里にて深さ深徑八
尋にして底はケイなり此に多くの樹木の浮流せるを求む
アニワ湾より二ゲレイン程き淡水貫ぬを見て即此所ハ一大河
口なるを知る之即此河口をとらんと欲し海湾の内
に船を廻し北甚西より東甚南に転するに河口ニたる
を北なるハ最大にして第三時船の北西七十二度に見る即北

河口をヲリコワと名く幅十里に過く北緯四十九度十
四分四十秒西経二百十六度五十八分となる此より針路を
東南東に向海湾の北濱に沿て其東端に到り再源に
沿て南に向湾の北東隅に繋揚を尋及海源七尋より
九尋之翌七時に湾の東端を去る此より南に向ふ然とも風
弱く八時十尋にてケイの底なる所に碇す翌四時南東の徐風
出るに因て直に碇を揚て南に向ひ船を遣りささり第七
時には又風止て無変より僅之里を行て再碇を下す海の

源八十尋より八十尋迄の間にて底は或は礁を或はケイと
砂とす此湾の北濱は東よりして山嶺多く濱も嶮岸となる
船は陸を距る四里許なり此辺の地は居人何等の徴なく今は
終日風止ことなく七里はリエイテナントヲトマロフを小舟にて湾
の東側を遊覧す即ち昼後五時に彼も返り来り此時南東風
出し七里は船をとめさり備ヲトマノフ彼に行て一河口幅十
五尋源七尺河を見彼此河を五里許遡上りみし処其
多く河の南側林中に野獣多く人家は形く唯河濱に大谷を

然るに所謂アイノ三人海猫の皮を服せしを見之に遇ひしと覚へ
ともにアイノ彼を見て逃け避けたりと又其處に雪尚ほ
澌樹に始て ともつれかゝりて河の源ハ初九等より漸々
く雪等に減し半里許ハ其源何れとも知らぬ此灣の東側に
ハ船を泊すへき所なし 阿部氏認る名ロベン島と バチーセ灣
北東側の間を圖に源三十尋と記せる所の外に碇場を
得たりしと云ふ此地第二度に碇せし所ハ緯四十九度十三分
東三秒経二百十六度十一分三十秒とす羅針ハ諸経に測れ

中艘を取て〇三〇八分北東傾とす
天氣晴く朝よりパロイテルは静り風ハ船を出すに便ある
故に予印船を全く東に進め此灣の東側を經てロベン島邊
を遊覧し 其ロベン島の礁の鵠とパチーンセ岬とさらハロベンとパ
チーンセ岬の間なる海峡ハ檢査をすとも止ぬへし此處ハ無碇
家まも航海家にも関係少しとす最近且カストノ 云船此に
二三回も碇泊して頗る其方置を詳にせし何れ之此地に由て
予印後に針路を南に取

我輩の測定は バナーシセ湾の北端ハ緯度四十九度十九分とす
但阿蘭陀人の書には四十九度二分と記し又此辺の一湾を四十九度
二十五分とす然とも卯之を然とせは何者か是は此湾の北側ハ
八十分と東の岸南より次て南に當るとは満つるあるまて三日の間
此湾に船を遣て其ところ所を測量すと寔合ならさる所之
ロベンシ嶋及其周圍の暗礁の方置ハ詳にすると能ハ甚
暗く風も強く波高かりし故卯針路を南々西に取て海濵を
時まては九尋より二十七尋に増し夫より又減して北にして卯考

ろに我針路を西とす是を轉すロベンシ嶋より北東に當て
是故に此より針路を南西に變し晩に至り南東に於て
て波礁嶮の方置を詳にせんと欲せし之 次後空晴風弛て
二十四日昼中前ハ日も照らし故に測量に四十八度二十三分五十
秒の緯とす然とも其地甚不分明に関て一二分の差を明に
する事能ハさりし之 午後ハ時々ロベンシ嶋の周に何ら危險の礁を
三四里の距にて此礁ハ北方にて西より北東に出波濤劇
く之に打懸り其地に廣さ、詳に何り難く ハ彼礁を変の下に

十七分全周殆三十七里なり 阿芙蓉ハ島に南端を四十八度
二十四分と一アツロスミーの島並に ラベロウセの地島も四
八度零五分と二百十三度五十四分と距るは南に於て
三分度の一両に於て二度の差とする也
南東に針路を取に深さ七十尋に場なし 第五月二十七日
暁マルスセイル名帆を張て東に行に風は北岸より東にて強く高
濤東より起り空晴く西隅かかりさるも直に到て天氣晴
測に緯四十七度三十九分○四秒経二百十五度十五分五十

延振りさる故互へし已此方置ハ氷を消除する障りなりとこえさり波
の激揚目のごとくさけ東に寄かけたり海深三十九尋にて底は
ケレイなり 我等此島の位置形状を詳にする後舶を南に
望むに空晴り石膝（縹か）標と為りて彼島見え深さ少し
減す南岸南東に行ると六並深さ五十五尋第七月十日已に
此島の北側と東側を見今二は南側と西側を見ず出島
の位置長濶は詳かにしこ之を北端（端）は緯四十八度経二百
十五度二十七分南端は緯四十八度二十八分経二百十五度五

分五十二秒是カムサツカにて校正せる表に顕ハせし迄に諸
風静にしてマルス帆を除きブラム帆を張る日暮には
風止船氷中に入て西より緯風来り即船を北に走らしめハチンセ
岬を求んと欲す海深百五十尋にて底に至る泥ハ古今胡七
時に西北西に当て一塊の氷を見る北東より東南東南東に
は大塊南時ハ危険の氷を逢避て更に進し即針路を東
南に変し彼氷塊を廻り進て再針路を北北東に定
時に又新なる氷に逢て再針路を変し夜中不防波

を激する音を聞船ハ唯帆数を減し常に出帆の湾口
水路に当て夥しき氷あるも船ハ南東に向て之を避るの
外なし此に至て思ふに今迄北極熊の多く北緯四十八度の處
ハ航海甚危険なしと故に針路を決し今般サカリンを
週覧するハ止ぬ直にカムサツカに到りレサノフを上陸せしめ
尔後再パチンセ岬に回へしと是に於て氷を避て針路を
クルカス諸島の方に指し四十八度の線を守りて其北部の
諸島を週覧せへしと是諸島に四の　所謂第十一郎

ラウロケ島ハ甲比丹サリイッエフ此名義なる者及ホッフし海峡
中の諸島を遊覧測量し従来の未詳を補ふへし今般
序に此諸島を巡覧するに別に時日を費すに非すとおもへは之
二十八日西洋第九時の大風夕に至りて益強く是よりかへりて諸島
も猶遠く隔遠は船ハコルス帆の用意して風下に当る波濤
劇しく起こるを怖れ風少しく弛む北西と東北に西東
と東より東に陸隔をしる然とも天気晴れ終に見て渡之を
又矢に風は静に東よりも帆を張り朝皓に我より遠かる

東北にして東に高き峯ある嶋を此島と我等今般関東に見
たる第十二マテエア島の間にある此島々の間なる峡は。八九リ
又の記に濶二十里許りと危険なりとすれ共之 サリッエフ右図
子は 濶二十里とす午正の測北緯四十八度〇二〇口西経
二百〇七度〇七分二十四秒也彼峯ハ我北東七十一度に離れて
十里余十二里の距なり此峯其島の極なりしてこの子北をサリ
イッエフ峯と名く此時風も止み潮流強く船を西に流し南
より従風なかりし遂にサリイッエフ峯を船の南西に見て又サリ

リイツヱフの嶋に此島と共地に在島の間に海峡二十五里
路を載せてパルラルの記にハ其濶七十里とす我等も迷に
之を見さる故其濶を詳にせす只其危き島に臨みて往つく
へき也夜十二時に風強く東卯風となり下に乃ち穏なく
唯サリイツヱフ峯を南東に十五里許に見ラウニク島ハ夕に八
里許の距路を時に数々海を測るに百尋に至て底に至らず
第五月二十日暁に尽く帆を張て東北に東宗行に風ハ南東南
東にて雨雪ありて暴風ハ一時許迄て卒然に艦の

前に南て小中しあるく頂平なる島右其南西隅海に
臨て緯ぐるまて著し其北西隅ハ傍ら低く東に迄也く
陸起きて礁なし艦ハ此島の二里許の距に寄迫に
満ませけ数須の礁に激し其の嶼に上陸せるをハ出来
ます之而其島に少しの古人見えさる踪しく島ありて
路過き里此島は「ハルラスの記に「エシツルと名けクルリセ
諸島の第八十の島とす緯四十八度十六分二十秒経二
百零六度四十五分ロロ ラウエテ島の如八里とす卯見

に此より針路を東南に又東南北東に或北東に東南東に
取時ハも未や島々ハ遙へ隔りと南東風烈しく船
の行殆五コイフなり然るに第十一時卒然として四ツに
明る孤島僅に水面に出るものありて所は北を二里許の離
に漸過午正に船の首に之を見る風東北と吹暗く船
を正向に島の方に吹遣る故に彼の礁の傍に近き
るにて恐懼し船を南南東に遣るに潮流忽
にして北西に流遣彼礁島に向へり潮流と風の強く船

の行八コイフ時にハ彼礁島を漸過て見へ隔りぬ時の間
些を試んとせしが程之を為すことも能はず又北東に一高
島の四傍の中に高き船よりも見ゆる潮流の急激なる濤
を起し船の傍にて変ハ深百五十尋にて底に至らずといふとも
其の外に一の浅瀬を見るといへども所は北にヲホーツカ海に行の
針路を取られ外部しとするに暴風雨の来るとする様にて
バロメーテル忽然として二十八トイム七リニイに降る所諸の
帆を納め唯セルス帆を張り第六時に帆を南西に南西微

東南に西北に走るに風の劇敷幸に船の行迷せずして
八九ロイ之空の晴く五十尋の外ハ見透すと雖とも礁
島に突当て船を全く損すまハ実にかうう此時に有らんと思
遠み海島にも ヌーツカ海の針路の標示を示されハ唯平ら
推量にて針路を取候処一時西及西北に走り数
五月三十日朝に晴北東風烈しく細雪を交る
ルモメートル油候より一度に降る第十時暴風止て空晴
子午にて予経度の測を東に北西の激勢減しさるハ「クル

リセ諸島の間に於てハ激流急なるもその進退の趾り
南る故なるへし此に ハル（又ハル）と名く一群の礁をさる此
礁ハ イカルマ島と ミユッシル島の間に在て ツユリンコクン島より
南東に当東に十五里有り然とも空晴して之を測るへき程
然とも敢ずるに四十八度三十一分に二百の六渡十六
分西として其ハ実に有るにて
天気晴風北西と有り船の帆を盡く張て北東に走に
次日第六月一日霧深くして ヨンコタン島の高峯を見

我始く書前少し北ニ南ニ陸地をミる然ニ風北と
野り其徹中して ホリエミユシキル島と ヨン子コタン島の間を
通行せるの望を遂れ船ハ ヨン子コタン島より 二里許ニ
て風全止船を南殊ニ流すニ由て船より小舟二艘をおろし
船を地方より引離さしむ 海底ハ細砂なり 第四時半
ニ北東ニ西より勁風吹来るニ由て ヨレ子コタレ島を北ニ
カラミユカタン島との間ニ船を還る バルラスの記せし海
峡を三十里ニ半の洞とす 然るに モンカンリエシキイ島を北東

西ヨン子ニタン島の南端を南東ニ十八度其北端を正北
中ニ北東三十八度ニ見る 第十二時 カラミユカタン島ハ南東ニ見え
其後少しして シキアスユタン島南西四十二度ニ見ゆ 此二島上
に高き峯ありて 遠くより望むへし 夕八時ニは其間
北瀬戸ニ在 第十時ニハ已ニ勁風ニて之を通く 此より
針路を東ニ向 此瀬戸ハ 幅八里ニて 南側の湧渡危險
なし 然とも 深流急ニて 風微なれハ 反て危かるへしと
思ふ 總て此諸島の間 暗き所とも 何迄とも 風ニて 我ニ利ぬ

是ニ定ム島諸危険の處を避るが故星

次日針路を北東ニ取て第七時ボリロユミユシキル島の東側

を見る事ニ地高く雪ニ掩へり午正の測緯四十九度十九分

とす然とも太陽雲中ニ在されハ一二分の差は免れ

難しと思ふ カラミユカタン島の高岸ハ北緯四十九度〇八分

西経二百〇五度二十分五十秒とし 船の南西ハ八十七度ニ

見ル ヲンネコタン島の南隅ハ北西八十五度 其北隅ハ六十二

度 ボロミユシキル島の南隅ハ北西五十度ニ見ゆる也 羅盤

ハ北東ニ五度零一分の傾とす 甲比丹キング及サリイシユ氏

羅盤の傾も此海上ニ於て少しく北ニよりて四五度の間なりと爲ス

は唯一度二十七分北北東ニ傾ける 我航海の中北西ニ傾キ

ハ二度ニ過ぎることなかりしなり

故ニ東風強く船ハ頻ニ西及北西ニ行て皆然天氣暗く カム

サツカ地方を見ることを得す 午正の測緯五十二度二十八分経

二百〇二度〇二分五十秒まて よりハ南東ニ

三分又西ニも同数とし是一度ニ時ニカムサツカ地方を見ニ

羅盤の度北西四十三度より北西二十度に至り見ゆ等ヒ
時雲中より高き峯を北西四十六度に見る如此数回其須臾を
ミ一ト其南隅ハ日最高しとす我望見せし所ハ全此と合せり又テネ
ールペイソンヘレベハールデ ベルグと云ふ外に明なる名もなし依て此
ヶ島に別に名を命し今のカムサツカ北辺守コセレフ氏名を取
其緯五十一度二十二分十秒経二百〇三度〇一分三十九秒
とす又第六時シユムシキユ島アライド島及ロバトカ岬を遠に
見日暮時に月の距離を数回測て此にて経度ハ二百〇二度見ゆ

分三十秒なるを明にすコセレフ峯ハ此時我北西二十一度
に見ゆ月の子午圏の度を第九時の測緯五十一度五十七分
とす此夕八時ロバトカ岬ハ我南西八十六度三十分アライド
峯ハ南西八十三度三十分に見ゆ今我ハ須臾にて船を北及
東に送る然に其翌朝第八時ロバトカ岬ハ我南西四十度三十分
アワッチカ峯ホワヲコトノイ岬ハ西し筋に北東十一度二十分
に置海底百三十尋底ハ細砂なり船ハ是まて地方より七里
此距に在甲比丹キングの見し河口にありとする海湾を見其地

方にも近く見ゆるにて濱に湾曲多く殊にポヲロトイ岬
の南方ニ在る所ハ東風に當るにても好碇場なるへし北緯五
十一度五十三分二十秒経二百〇一度二十四分三十秒を占め此地
方六七里餘の距とす此諸ポヲロトノイ岬ハ我北東に五度三十分アニ
ウツカ岸北東に八度三十分に在其他アノツカ海湾北南の諸
岸並にポヲロトノイ岬の須海湾の口及北東にシキビユレスコイ
ハツシンも悉く見て分明なり甲比丹キシゲルハポヲロトノイ岬をザハレ
ア岬と名く印予カムサツカにて其名を聞さる迄と然とも其要なし

を名を志らぬ魯西亜人ハポヲロトノイ岬と名くカムサツカの濱
はロパトカよりポヲロトノイ岬まてハ北に湾まてアツウカ湾
の如も全北に行を遂此岬ハ三ッの崎地まて之内本名ポヲロト
ノイ岬ハ圓錐形の雄山まて陸を少し離れ遠洋り我測に峠ハ
北緯五十二度二十三分二十五秒西経二百〇一度十一分五十秒
とすポヲロトノイ山と名く高山嶺ハ此岬より北まて西に向て在一
此外中より望み悉も不可見の徑風に霧多くかゝると云ふて宜
午に霧晴て湾口ハ我北東北西六七里の距の在風南東に

此除風ありて各港に赴てシントペテルヱンパウル港に入先長崎
を出て四十八日にして此に着せり
備此より使節并に其從兵カムサツカより取さる人〻と共に
上陸せしめ又日本人より贈りたる塩鯖を始其の官庫に納め
且我船の薪水を備へ翌六月十六日に八再アワツカ番にて
順風を待て彼サガリンの又残せし所を巡見に出へしと
思ひし所に不意の障ありて此所に日数を費したる事ハ
次篇に記す

即此航海の中に志我に氣を痛めたるハ長崎を出帆
するを囚し一朋夫の以前伊豆とたに長崎より上陸
の有さる者痘に傳染せしが若者ハカムサツカ産にてカムサツカ
にては未だ痘を病さる小兒多くしと舟中にては於て痘
を経さる者もあらんと恐れ且此病の船中にて取扱難
きものなれハ又カムサツカにして此を彼地に傳染せんを
恐れ然とも船中の諸人ハ皆已に痘を経さる者にて只一人
此之を慥に手法を施し彼今痘を患る者其痘甚良性

寄来は依て此を取て彼二人ニ種痘せしに共に已に痘
を生し者と見えて痘を発することなかりしなり今カム
サツカに居たる時は彼痘者ハ已ニ日数を経て痘瘡
も全落ドクトルアスペンベルグもまた伝染の恐なし
となせども猶慎を加へしとて予此に居たる数月前
此患者衣服臥具等ことことくスノイト人名の説に従て之
を薫燗し諸人の助被ハ石鹸を拵てよく湯にて
之を洗ひ諸衣服をも日ごと気中に曝さしむ
パトロパウロス

此逗留中ハ府人と交ることを禁し上陸せし
舶夫も三七値ハ他人と交ことを禁しぬ往時千七百
六十七年明和四年ヲホツカよりカムサツカに痘を伝染
し往なるカムサツカ人を夥しく殺せし事あるが故に
痘に於てハ殊に深く慎を用るなり今カムサツカに
此に来る舶の為に此伝染病の恐ある時ハ速に平痘
を種る法を行ふへし予思ふに支那にてハ早く
已に平痘を種えたるにヲホーツカにも早く伝ふ

なく之を試むへき事也

# 奉使日本紀行

## 第十七篇　ペテルエンパウル港ニ逗留

シントペテルエンベウル港ニ二艘の舶あり一艘ハ官家の運漕舶ニて ヘヲドシアと名く 按針役アスタシーフを上官とせり 一艘ハ亜墨利加商館の舶にてマリアと名く ヘヲトシア舶ハ去年第十月カムサツカに

屯戍及土人の為に糧料を運送し来る者にて其船
新にブリキにて飾りさる船にて此より前に八隻ばかり
ヨトテン船の名蓮漕を用ゐる此船は昨年なりテリア船
も亦新に製してブリキに飾りたる也とも「ヘラドシア」船より
は手軽しとせし此船ヲホツカを出てコージアカに向ふた
途中大風雨を得て危きに至る我等日本に向ふ前に
カムサツカに来り何も在り此にはリユイテナント上はてシキイ
ンを上官とす其他はリユイテナント「シエキン」カルビンスコ

イン及ボリソフも共に亜墨利加商館の勤を備し此に
来り存せりボリソフは「マシキイン」より亜米利加商館のアリサベ
ト船に至としてヲホーツカよりコージアサに赴しにユナラ
スカにて冬を経て糧料に乏しく甚困窮し且船
夫等多く敗血病に罹り斃死さりとなり亜墨利加
商館の船には毎年敗血病に罹り人を損ひる事実
に悲歎に堪さり年にヲホーツカよりコージアクに往の船
此人衆彼地にて損する数を算せば頗る夥しとす

亜墨利加まて毛皮を買は大利を得んことに欺かれて
彼地に航海する輩彼商館の使役に属して必失なる
危険を経て唯単身にて再欧羅巴の地に返り魯
西亜の土を見ることを幸とするなり 亜墨利加商館のアゲ
ント財主より遣る所の手代なり 財主の勢を以て彼地にて利を占逞ん
此に属する者は此か為に苛虐に堪へしとなし
「ヱハテジアク」「ユナヲスカ」及「シトカに往来すといへとも此にて
アリア舶の殺掠を見 ユージアク商館の説を聞に就て察
するに 亜墨利加商館に属する者は都て懇望すへき業な
りとす
予亜墨利加商館アゲント行事を此に述へ只同擯似
人の誤を得(述)とも然とも予其此に在りて彼商館の
事を閲し輩は共に心を傷しめしく事あり依て予其
見聞きし所を默止き得ず之を述て此事に意を労する
人の憂を慰めんとす予考ふに アゲントの勤は其主を離
遠隔の地に在は之を務るに索して其任に背て私利

を営て　主を欺て自罰を遁るの使たり此賤我
財主は其金を惜き擲ち而して商館にて彼為に使
役さるゝ者の困窮を救之へしと然るに近比其上
司の智を以て彼地の使役の困窮を聴も「アゲント」
貪を制するに指揮したり而る説の無益なる事を論
し政

此亜墨利加に赴輩もたとひ其志は美なりとも其武係暴
恣にして政令に從ふとも皆過て注さるへし况や

「ニユカーワ」「ドンガヒコ」にも労さる貪地にして食とするは鯨の肉
と油とを最好とする者の外なきか之貪に堪へ商館の「アゲン
ト」に屈伏して使役せらるゝ達政令此風を受る所なき 自注コトヾ
アゲント及商館所属此地方に裁判等預之なと志らすも人詮の此に往へんや彼アゲン
トの首たる者は商館所属の地緯五十七度より六十度経
百三十度より百九十度に至の地方に於て總官の如き勢
あり然とも其指揮の宜きを得さるを以て年毎に其小衆の
人は減損するは彼アゲントの獨利を貪るに由て起る所也

リユイテナントダビトフは昔スエージアク」アレウト諸島及亜墨
利加地方の勤ニ在て彼地商館所属の事を見聞せる
多く其繁要を集めたり　ベテルスビユルクニ返り校行を
なせり其中ニ商館所属地方々の要を置　アゲント此所行を頗
詳に書記して著せり
此ダビドフは同僚ホーシトフと共ニ千八百零九年文化六年己巳
子ロ舶にてベテルスビユルグに返り入水し死す其著す所紀
行ハ舶將シキスヨフ此を甘て軍艦廳ニ之を鏤板せり也

但島ハ此ニ役僻遠の地方ニ於て其處ニ勤仕せる魯西亜人
此等事此為ニ取扱ハるゝ所の如何と云ふに此マリア舶ニ在七十
人の有様を挙て今零せしむ
マリア舶の如き凡百五十トン許の舶にて人を乗せる七十人
即甲比丹諸役及商館のアゲントも其ニ数入る此人員ハ
別ニ積載せしといへとも舶ニ乗して荷物し然るに其中に
病者二十人ありて由りくと臥せるものくるしき様なす
故ニ其他の五十人ハ相押合て大指一ツの空所をなす

是故ニ「アカビユルコ」よりマニラまでの地方ニてハ気候
宜しけれハ人と船底の上ニも寝臥しぬれども「カムサツカ」
「コージアク」地方ハ気候ニ至てハ露宿ニ堪へからす実に船中ニ居
相当の床の外ニ一囲より臥具の備もなくことに唯着服
せる衣服の外に有余の衣服なく雑さる木綿の垢つき
たるも人々争ひ求め又暑ニも襯衣なる者ハ稀にて其ハ甲
なりとも皮衣を着し居又人々髭も剃らす手足も洗ひ
得さる故也

備ニ病者の不幸なるハ我等実ニ其ハ哀むへきを尽さり
彼等今已ニ陸ニ住する十箇月を経ても數盈病及
黴毒の瘡病癒へてらえ是之シントペテルエンパウル港の
醫ニ治療を受るも猶恙なるニ此より後又長き航海ニ露
もなく左間速なる取扱ニ遇ハ終ニ斃れなん今試ニ條
の食物を問ふニ其所ニ在二桶の塩肉を其食物となり
其故ニ試ニ肉を一切ニ示さと云ハ其ハ桶の蓋を取さり
臭気堪へからす其ハ変を立退て之を避るに悪臭

の塩肉と少の袋に入たる黴敗せるベスコイト蒸餅の類を此病者
二十人の活状にすれハ食物に富より是非港を出る前に
かく已に病者多き故也嗚呼病者の食物とする如此もの
を以て快復を為すへきや總て船中の最とする食ハ鮮乾
肉にて其最好とする イユキヲ以て製せる乾魚にして此を僅
人々に分配する而已又總てハベスコイトの代として然も稀に授
麦粉を水にて捏たるもの彼輩に此をビユルジンクと名くるもの
あれとも火酒ハ宜しく露多き地方にてハ良切なる飲料に

れとも船中ハ曾て与ふることなし 夫 亜墨利加商船に勤仕
する者ハ總て先きこずの軽卒者なれとも宜しく兵士水夫を保
全すへき事に其主国たる者より彼等に恵を用ひやるさへ乏しんや
彼等も各々るを勤る者れ進ハ彼を飢しめ彼を畏るへき
病に嬰らしめて贄の如くするを彼ら勤の價と云へきや彼
輩国より罪国たる者に非すと彼等罪を犯せる者なれは
既其罰ハ官より受たる者之何を以て重て之を罰せ其罰
船主より重く責しまし此理あらんやも又彼輩を罪人と

するも魯西亜官家の恵にて已に之を赦しあるを亜墨
利加土人の悪徒に与へて之を苦しめ苛虐するの理なし又
彼等アゲントとの為に使役せらるゝ奴僕のごとくなれとも
是を土人より苛虐するを戒しむることなく何ぞ了せざる又商
館の使役には罪人と悪党とを択此に用ふへしとせは白里地
方の貧民の為に是を利とするや　亜墨利加陸地及諸島の
人能為に患ひ有りとするや又オホーツカより亜墨利加に彼
輩を送るを我林業は商館の為に利ありとするやうに考

にバルチセ海東洋諸島と亜墨利加北西濱との間に航海
せるハ商館よりバルチセ海の水夫として毛皮商と亜墨利加
より送り出すを許すへし其舶には良船夫を撰て舶主よく
之を指揮し此二の貪人を悪徒の為に苛虐せらるゝ故に
すむへし又此不幸なる者を保全することを旨とす及命を各
土の居人に志らしめ我官家の仁恵の意を明白にし各地の首
長にも能之を喩し是を商館所属の主役の任とすへし
又其勤仕の水夫本国魯西亜に返さんと欲せは之を集て送り返

出へし當時ハ彼輩の母國を停止し返らしめす何也留
ハ彼輩アゲントに債有る時ハ厚く之を償ふ亦雖是は米
利ッカより出立せるを許され之を償ふ者は久しく其地に
居へし久しく其地に居る時ハ彼の財ふ取の財を費し尤し又
新にアゲントに債を買ふに至る又或彼苦辛して僅に財を
貯へ其故國に返らんと欲する者も米ッカに在遊の際に於て忽
其財を失ひ終に再コーシアクに往さることを得さる也り又彼
苦辛して貯へし錢を直に「テルス」ハウルに送り得ハ彼の真ホ

償て彼地に返り其錢を失ハさることを残り得へきに此るハ商館
より制して再ひしめす是ハ商館にて彼輩をして久しく其使役
勤めしめんとする所為也

亜墨利加商館に勤仕せる水夫の生産を論ニ節道せる事
予已に前に云ふ如く彼皆衣服に乏しく木綿に乏しく總
事之を淨潔にする事能ハす從て飲食にも乏しく此れか為に氣
甚く衰弱して疾病に至り其苦辛すは身體の衰弱を
保つか和は論なき也且剣ハ水にも事缺くなり

下る桶ハ水迷ニ満之序ニ其ハ旅途の終ニは船中之人甚た
ニ乏しく残暈カムサツカに在し時シントペテルユンパウス港より
商館の小船エノナラスカより来るあり其途程五週を経者
此ニ紙の八日月とんと水を見ひ居し船中の総船滞今の日
十ク十二ストフ之を也し商館の船ニ勤るものこれか困窮
甚たこれをかす陸ニ居る者も名同しく困窮するハマクア
船の船夫カムサツカニ于冬を経しニ家屋の居へき所なく元
テン土主之内ニ住し船中とは同しく良食物ニ乏しく堪日

常缺へからさる品物ニ乏しく甚時ハ麦粉を運送する
足容易ならさる故ニ之ニ能足ることを能ハす唯火酒ニかりハ陸
ニも乏しからす故ニ陸ニ居中ニ火酒を飲る者殆んと
此乃為ニ多才を失ふ然船ニ乗さる後全火酒を飲ことを
能ハすして其身甚安泰となる故陸ニ在て彼等火酒残
買ハ請償より外を避は常ニ其価多く債となり富
此ニ由て彼等容易ニ此物を離れて飲む事を絶ち清る也当船
中ニて何所ニも彼等ニ火酒を買ふを許さゝるやと不寄事

然るに其船長より一日に幾杯の火酒を与ふへしと定規
を立て貴きも賤も共に便宜なるへき事なりけれハ扨又
船夫の陸に在て節度なく火酒を用ひ十ケ月計の間菜
品なくして前に云困難なる住居にて不良の食物を食
しけれは敗血病に罹り身体を衰へしむへき理之哉
日本より送る路の五人の亜墨利加商舶の船夫を　コマンシタ
ドより　カムサツカ　に連来りしところ十ケ月の長く雅蘂ニテ
旅を経まても盡く健康なりしく冬渡彼湾　カムサツカ

に十ケ月逗留せし後ハ四人ハ皆重き敗血病に
罹りより但我船中の人々その後又長途に就労せし
なれとも何れも皆息災なりて其外五人の内残一人ハ甚
身持宜しき者にて火酒を返し手まて故に此の地に来りて
在し若き者皆此地方に来りしところを後悔し亜西亜国
り帰んとを熱心外に然し但　カムサツカ　まて冬を経し
者まへこの如く不幸然る者となりしや　ユナラスカ　コーシ
別し上ニハ此より気候程よく食物居宅も程

困窮なる事迄は其地ニ住ん者ハ粗想ニ済む
願き事なるすや
リユイテ ナントホーシトフ及タイドフハ商館のマリア船ニ
首として此より コージアクに往んとせし 此二人ハ千八百零
二年 享和二年壬戌より 亜墨利加商館の船具を取具
始テホーツカより テジアクニ到る途中に逗留あるる
事なく 一夏の中ニ着きしなり 是歳八月末剥
ツカを出帆し 翌十一月十四日に コージアクに着せし

是諸ハかく速ニ航海せしハ此まて北船きを見て何の
船も二三箇月の間此を貿する者事ともなり去壬年
直ニホーツカニ返り着し 二億ルーヘル餘北七價の荷
を積来ると ホーツカに返り来り 夫より直ニベルスヒユル
クニ到る 彼處ニ来ては 実ニ彼の者を撓ゑを少なる
今まて拙き船の脆き為ニ 諸ゑる事となり ベテ
ルスビユルグに逗留あるを二月ありて再ホーツカに向ひ
夫より コージアクに到らんとせし此度は ホーツカに船を入

て冬を経しなり今度彼の出帆支度せるにカーストル
「ヘールレサノヱ」ハ此船ニ来り移り「コージカク」に往へき也「ドカトレ
ヲンクストルフ」も彼も共ニ「ナデスタ」を出て「マリア」船ニ乗組り」
第六月十六日即チ船「アフツカ」湾ニて薪水を取へて其ハ
「シントペテルヱンバウル」港よりハ此室を便なりとする故なり
十一日既ニ出帆の用意をしニ不意ニ船中の鑵より漏
河ちを見出し之を塞ま（屋中諸所涜し）に遣り修理すへき故ニ意外
ニ此ニ滞留をしニ又下「カムサツカ」より總督の此ニ来り
し

會すへきの沙汰あり止ることを得す之を待つへき事ニなる
に總督明日此ニ着すへき知せ有りさて「レサノフ」は「マリア」船
ニて九日夜此を出帆をし風ニ随ひ第十六時ニは既ニ此
湾を棄たり
第六月二十日終ニ晴風の好ニ乗て船の碇を揚しも然とも
我等總督ハ總督の着すへき志ちを得てより已ニ五
日を過さる了ニ来着の今の時候ニつき此ニ速ニ船を
出し「サカリン」の巡覧をなすへきの期を失ふへからん

と舶を出さんとせしに忽ち風起り ヨコイナ 此洲にてまさ
舶を碇せし
第七月一日烈しき南風なる暴風と共なる故直に碇を揚
げ舶を出せしに中らし帆を張り終る頃又南風と替り
再び風を失ひさらに此晝夜に總督の居所と志さし行る故
直ちに村に到り舎す總督の居所延りきし此節雪融
にて途中の河水張りさる故かく遅滞し總督も既に此
處に在まじと思ひ是より立んと下カムサツカより
ペトロパウロスコ

までは七百ウニルステン之訳程にて殊に危険なり其途中
水ハ河舟にて此の舟ハ甚悪しく危きと知り何舟にても多く
も十日此間を往返船舟を揖し往之此舟ハ瀝青を施し
中倉及後倉有りて庖厨の備も有り支那日本ジユリ出及
歐羅巴の處々に有る舟のごとく長き日数此上に居て大方の
景色にて其ハ退屈を慰むべき助ともなる此舟志淮して瀝潤
し易く怒風或大木の幹に関りても直に破舟する常
にて殊に夜分も最危く多くの人命を失んとす是ハ此等事なり

人の危懼の思ひを為すへし已に總督も今度の海路に破船
し傍人の救ひにて辛して命を助りしとなり
總督コセレフの難苦を顧ず精勤せると此旅行を無事
終りし事に感す陣し且も彼のイシギンスコ府より五百
ウュルステンの道路を経て下カムサツカに至らんと此途ハ大小
の車を引さる事なるか其路の険難なると前の水路に異
なるに此行ハヱユクツエン名地の聚落に其出張勤なりしを請
めんと為すになきしとせツユタツエセンを止白里の北岸の経旅て

魯西亜國に属し章をなせとも中々之全魯西亜人に服従
せさりし者なりしかコセレフ彼酋長とカメンノイ（イシギンスコの在侍の小村ツユクセン）
人とコリアチンに会して彼を全服従をしむる次に記すか如し
此互市場とす
ツエツクロ王工マなる者ツエクツエン北總官にて部下諸酋二十人を
率てカメンノイに出てコトフル子ツルコセレフを待彼其勢を張
大中てコトフル子ウルに示し種々讒をいひければ彼に喩し如し
魯達は彼輩に服従し去れ共は我等魯西亜の支配を嫌ふ
非す実に魯西亜人と親しく交らんと欲ふなりとて云ければ

我等魯西亜人の猛きと強きと聞及ひ又君の名も聞事
相察せんことを欲ふ事此二年中にして今始て相見ことを得悦
に我等を正しく取扱ふへきの約ありて許るハ亜墨利加商
館の毛皮商の我等と交易をなすに欺詐多く且我等を
侮りとるを以て已に戦に及迄彼等を殺すへしと思ひしか
又思へハ魯西亜人を我敵に類すへきに非すとせるを汝
に許へハ正しき計をひ何かへしと思ひてかく許る之とゴーフ
ル子ウル此許を聞て之を吟味し取調きありてチエコマを彼

雅族ハの首とらへきを免しぬれハチエコマ等之を称して言
價の毛皮等を辭してコトフル子ウルに謝するにゴーフル子ウ
ル其ハ贈物をとらす唯チエコマ此言に背くさる為に些の品を
交て彼等に火酒烟草飲具鈴呼嚕喰管の物をも与へ施
チエコマ等大に之を感歎し自ら短劔を以て彼等と盟を
立て云此劔尖にて少しも魯西亜人に傷を付まし少も魯
西亜國に違ふを有ましき也と深く信服を致しきりて
ゴーフル子ウル此カメレイイに逗留の内にチエコマを招て食卓

にはしたるにチユマ發るを少からん赦て其指に悪を除云
るるはゴーフルネウルは嘗に貴官人とする此なるに且キリス
チャン此人々なり我ハ「キリステンに非ず魯西亜人より八常に賤
めらるゝ者なて何ぞ其食卓に付ぶをとらんやとゴーフル
ネウル之を聞て彼に答しめて云汝等の如き正直なる男
此路と其法と食卓を共にするハ我に於て快悦する處也又
正直なる者の道はキリステン此教に入らずとも真のキリステン人
よりも貴へき事也と彼此詞を聞て悦を限なく人に告と

語し皆々悦をなしけりとかくてゴーフルネウル彼等と別を
告けに彼等翌年此者再會を我邦に於て翌年はゴ
ーフルネウルの舅前に予即と共に日本へ航海せし者を彼地に
至らしめ本意は ヱユクツエン人皆一同にゴーフルネウルの如く之を
貴たりと故生
此 コセレツ「レツ」ツユクツエンに會せし事ハ千八百零六年第六
月彼下カ弁ツカより予に書を送り達さるまて詳にすと ツエ包
此諸事及其言語をまて書集めんとなし達し故に予此書の

未た其内の奇とする條を附録に収備むへきハ千八百零
七年にカムサツカまて身まかりしことを
載す ゴーフル子ウルと暫く會話し翌日朝自ら船に來り我
等又彼を共に陸に行て小さき包を受取て船に返り其後
一時ばかり舟を船に上け碇を揚て翌朝四時頃に北海湾
を乗出しぬ

奉使日本紀行

第十八編 サハリン東濱

往日我等クリル諸島を過る時に見たるはクリルと名く
一連の嶋の方置 第十六編に記す を審にせさりし故に此度は
之を乗えへく欲し是由て我針路を緯四十八度五十分
にしてクリル諸島の筋に乗へし其緯に到まては カムサツカ濱
にそく乗り此地方の諸嶋を悉く實に測る 我等か作る カムサツカ
州海濱の図を修補すへし既 ロバットカよりシキビユンス

マイノスに至る地方は ロパットカ岬至小部の 露西亜の辺
見えたりし外ハ之を審ニ測り難き也
四日の間此濃霧の後笑七月九日朝九時霧晴九ツ時ゟ
破れさるにてヲ子コタン島の南岸とカラモユカタン島の峯我
見ゆるにヲ子コタン此峯ハ北西二十六度カラシユカタン此峯ハ
北西三十度ニ而七十里許の距なり厚き霧海洲の如く北
西より南西ニわたりて我等之を審にするに非れは其霧
なき地方と見誤るへかりし之正午に測北緯四十一度十

分西経二百零四度三十四分三十秒とす此測ニて此二十四時の
内は潮流の東乃方ニ漂きて一時ニ一里を流さし
を知る此續き潮流ニて此より二十里も北ニ在へしと
する彼を見を我妨けたる也昼後少しして サリッユフ
峯を南西八十五度ニ見る三時ニは此を正西ニ見る
此ニて彼緯ハ四十八度零五分三十秒ニ在ると称す
我此以前の測ニては此を四十八度零六分三十秒とせし
也此両測を中数ニ折して其緯四十八度零六分○○

ロなるをサリツエフ峰の真緯度とし其経ハ二百零六度
四十七分三十秒とすカラミユカタン シキカスユタン イサル
マ及テシイワンカタン七諸島ハ我より北西十五度少西二十度
北西四十三度及北西五十三度ニ見る前の此を通る時ハ
不見ニ小島ミユシルを見さりしか今度ハ之をミす此湾
はラウユク島より少の距ニ在といへとも此ク少中て纸き航
り我此諸島を見し一行にも見さる之此夕六時后
霧深くかゝ里夜中又数度て晴陰風ハ辰巳間より来

里彼危き島々の邊ニ在て潮ハ急ニ疾く且北流をなし彼
迄はバルニをつきさらんも知へからす所ニ波涛の砕る岩を
関とも是ハ礁ニ怒浪のあたる所逆但浪と浪の十字ニ
打違ふ岩所ゆゑ寄ニせたかゝる危険のありさまニて
二艘をと過ぎしに霧ハ厚く船より十尋の外ハ見る事
なく我か船をゆくの帆ニてまきり頻ニ深さを測るに
此深ハ測ハ此邊ニて无益ニして常ニ小島より五十尋余上
之深百五十尋ニても底ニ到るを得すとす迄は甚かくて

第七月十七日四時ニ霧晴て散しイタルマ」チシリンコタン」ミコレル」及テツコテ諸島を見得るニテウサラ島を最下に見てサリツエフ山峯を見に此時羅盤を試るニ三度十二分の北東ニ差とす風ハ北風船進も是ニ於てヨラコケ島と第十二島とするマタリア島の間を乗るへーと定め霧の晴て後ハ地平甚高船進は此辺ニ於南ゆるクリル諸島を見へーと思ひ船をむるに幸ニマクウア島の外第十四島及第十五島を見得るニ此第十五島ハ拂郎察

人諳厄利亜人の地図ニは マリアンと名く是也

八時ニラウユーケとマクウア北間を通て丈より針路を西り向ふ北ラウユケとマクウア北間を平ナギスタ海峡と名く北一群七ツ諸島ニ於て好航路とす其潤ハ十六里計りして全危難ナ海校の瀬ハ西流して我船ヵ年時ニ張く流逆浪の音甚浪の如く鳴多くの鳥の飛浮めるを見る也

我船カムシヤツカを出る初日ハ海の景色東北ニ毎ニ従ふ実測の経度と一致せ也速へ全然と第七月十一日ハ其速只六

今知りし是ニてクリル諸島の緯度を明ニ知る海上無道の不
分明なる者を見ても幸ニ誤りなく其節ニ乗り得さる迄也
幸ならさる事ハ如き航海ニ於ても猶いかニしても量程車ハ
激しく甚た疎なるもの多し然とも不巧者なるハ此猶ニ頼る事
を兼て量程車ハ誉とす然とも実測を専らハ今ま二非難ハ
特ニ之を信すへからさる事ニ之故ニ巧練の航海者ハ此を以
是き航海ニ用へすして只此を量る心意なる事なき也
露の晴さるハ僅数時の間ニして其間ニ我等クリル島回九

好航海を見す次ニ幸を得しニ十時ニ復故のことく霧靄ふ
く然り夫より二十四時の内晴る事なく風ハ始め東より吹移
後南西となり第七月十三日ニハ終ニ北西風と東北風ニて
霧を吹散し晴朗と成る正午ニ北緯四十八度二十一分二十八
秒西経二百十二度三十二分四十三秒ニ在て顕ニ正しくウルツプ岬
ニ向ふさり是ハ来日サハリンを尋ると止めさる前ニして今又
此処より始んとす此岬ニ於て再ひ霧て海の深を測ニ深て
底を知さる第七月十四日朝日ニ於て午時北緯四十六

度二十七分西経二百十四度五十三分ニて始て海の深七十
七尋ニて泥多き砂地を探り得夫より三里北ニて七十三尋
ニて礫石の底を見る 此船は パチトンセ岬よりも ロッベ
ン島よりも二十三里を距る 今暁ハ船の周囲ハ影しまぜ
ーホント と水ニ游ぶ諸鳥ありて繞ふこの如くなり 此時霧か生
地平唯十二里の外ハ見さる故ニ礁成土地の有る哉
見得る事能ざれ而右時ニ我船ハパチーン岬の南ニ在し
と測し故ニ是より直ニ北ニ向て船を進めしかども霧深

故ニ五時迄止ミ我船は船を東ニ向け廻さし遂ニ緯ハ卅
八度五十分なるへし 百尋ハ深まで礁石の底を得たり
且船ニ到り霧散し 追ては此時こそ土地を見んと
欲せしニ天氣俄ニ変して暴風雨河なくを催ふ果して
急ニ空ニ黒雲風雨まじけしく我船ハマルスセイルにして船を進
ニ登ニ到て大暴風となり夕六時ニ最ももしく マルスセイル
我吹張裂き唯ニ 帆の名 ストルムセイル 帆の名ニして船を保
たせ此颶風は北東より起りて漸北ニ廻り北西と半路

ぬ我船を湊手より平里吹寄りける天氣儀二
十八よりル九リ一子レ降さるが夜中頃より再升り暴
風止ミ翌日は好天氣と成る數時風も靜なる後北風
と成我等諸帆を張て地方に向ふ夕八時太陽西
に没する時やうやう土地を見出しゝ赤き嶋并嶋嶺
外く掩たる也其地坤より庚申間に引いたし庚申
間に平にして高き地なり別に一地の如く見え北と
南の両側ハ低く降り見ゆ海の深さハ六十五尋にして

ケイ此地なり我船土地より十里許を距たるにバチー
レヤ岬の南隅に土地何ら我ミす那中南に乗り下し
百尋の所に至るに底ハ中また（やま）よりケイ迄て何里
翌暁第七月十八日昨日見し平高地を我船の西ハ
手に近セ岬を南西十七度に見る風ハ南風迄は弱ク此地の
湊を委く見んと欲し湊より三里の距にまで船を寄さる
に霧厚く成風弱く東南に廻り近るまを得ず又船を
湊より遠けぬ海ハ淵ニ深く南波平なる地の東南六里

而して六十尋夫より二里を過て七十五尋にして礁
石の底なり霧ハ丸れ時々雨を交へ翌十九日十時に
至て晴たるを以て直に坐地に向て弱き西風筋十一時
再サハクン北須を見る此所西ハ緯四十九度ロロ経二
百十四度四十二分也登後時八子ーシセ岬を庚申間ロッベ
レ島を未の方に見たる也
パアローンロ岬ハ我等ヵ測ニ北緯四十八度五十三分西経二百
十五度十三分四十八秒とす此岬ハ甚低く圓の童然ごめく

而して其上ハ純平にして此より南に平かなる浜岸の岸也
さなり岬の北なる地も甚低くて動きよ一筋き所あ
四十八度五十七分に在於て八チーレセ岬ハ高からすと云
此島にて著しと云也ロッヘレ島の中央ハ緯四十八度三
十二分十五秒経二百十五度三十七分〇〇とす此島我
従ふ所の海北北東側及南西側ハ既に第十二篇に記載
きり
今既サヘリン北南東側の両隅を測り後亦斜説を

此中て茶ニ云園の如き地より少しく西ニ向て行り
深き海口を見るニ至る其南て土地河を見るゆて
戸艘を成辛間ニ向て遣り其の處ニ去地の別也なき
に非すとす此海濱ハ緯甲十九度零五分ニ在て偏き
地ニて因あり予此を「フラッケハーイ」と名く此處ハ大河の
流お出る者へしと察す此海濱の北端より去地り
向て潮ると言く東ともいへとも甚高とせなに至る溪北岬
崎の先あるなく一里ニ之を見る所ト傍る也

第七月二十日 夜風ハ未丁間ニ向て吹予針説を土地
ニ向けす 其距十四里許ニして海の深を探ニ七十五尋
或八十尋ニして底ハ礁悪在之船路ニ測量を為す夫より
乾の方に行ニ天気甚好し 我等思ふニ坤の風の吹間に
霧を見れ何之へしとす
東風ニてハ忽霧を起すと 既ニ船ハ久しき間の一つ事
天気ニて志かるへし フラッケハーフの北向の隅ハ緯甲十九
度三十分ニして乾の十九度ニ在て須の地方ハ昨日見

如く其内地深く山嶺畳々相連なりて海濱ハ白色
北極光の此ニ於し見ゆる陸地北面此より其南
側と別ニなき者ハ定て好港をなせりと見ゆ然とも
其高き高山岬ニ向りて其の間ハ霧深く我より甚だ望ミ
らすといへとも之を随に見んと欲く此地の方角に従ふ
考達は此ニ小河の口あるへしと思ひしニア於此地方を詳
にせんと欲し霧なき晴朗の日を待ちしとも遂ニ其
量をとけす 唯其地北経緯を記して後の航海者に

告く此地ハ北緯五十九度二十九分西経二百十五度二十八分
ニして ビルリ ニリス ハウセン と名くる岬の西七里に在此岬ハ
北緯五十の度三十五分西経二百十四度三十四分ニ在と
此ハ我船乗氣五のリユイテンテントの名を以て岬に名付也
我船カムシヤツカ地方より来る時二ハ錨のアルノル
ドの コロノノーテル と ペニユングトン 此時計と只三
移を見事差へさるなり 是故ニ晴朗の日を得て
月離を測りて時計の差を檢査せさるを「ワシ

「シグトン」より「サンドイツ」諸島に至りし時の如くせんと欲す第七月七日 盈按七日ハ十七日乃誤なるへし 太陽と太陰の距離を測る五と六行中にて其測量の中数をば時計の西差二十一分三十秒ホルチルの測数をば八二十七分四十五秒とす如此大なる差ハ何之へしと思ひ遂に考察るに此日月離表の誤り何なるらんとホルチルにエルクの月離表にて月の経度を算するに其差七十五秒にて経度二十八分四十五秒の変を得て先哲に時計

此差ハ我測にてハ七分十五秒ホルチルの測にてハ一分〇の差とす譬へバ第七月十九日不の右距離の測をなせる事十行毎行五と六との距を以て此即時計と我等の測と二十分の差ある先哲に皆も月離表に大なる差あるへしと ホルチル又ビユルクの表に従ふ之を算するに月の経度の差コンノイサンセ、テステメスに四十秒の加を見る即経度に十九分の変を起すなり而してコロノメーテルの差ハホルチルの測にはロ、十五秒

弟測りは三分十二秒の差違とす第七月二十日に月離
を測るを五秒まて弟ハ九分四十九秒ホルスルは十分
三十秒時計の差違とし第七月廿一日に測りしハ其差
只一秒を増加し且此日太陰経度はビユルグの表に従へ
は甲時計の差一分にして弟とホルスルとの測を折中
差違は其差凡ハ経度十五にて算に堪ふ其を甚し
三日の測量にて時計の差ハ数分の差違とも貴ハ西
差なるを明白とす是海上の測量ハ甚不定なる所以なりと

すなわち慮迄弟思ふにコロノキテルと月離との違ハ一度を
四分とするなり一に過ぎず然るにコロノキテルに従ふて経度
に大なる差を見ず只ハ時ハ先其誤りあるを検出へし
天気曇り船漏流甚敷器物不断動揺し兼ふ
常用のセキスタントなる器良なりしか大概之を測す
二十秒の誤あるを常とす且其測に意外の誤ありしなり
月離表にも差誤あるを知り弟も実に差とする
表に一分の誤ありしを見しも何ぞ如く故に実測に経

度一度四分の一を違へるも尚全度すへからさるか如く
我等か日記と先人輩「コレク」及「ラヘロウセ」氏記との
差も尚捨置に備る所以なり且月離の測は時と
處とに於て常に行ふ事ハ「コロタールテル」氏教り
勝星殊に測量器と良時辰を以「ビユルグ」氏
月経度表とを用て之を為すへし然る時ハ海中にて
測量しく其各の差何ほとも之を其上に於て之を正す
に錯出連はコローメーテルに大概違何ほとも其奥数

紙測量定むへき所なり
海上にて諸器を以て測量し之を比校するに於ては
「セキスクレド」を最好とす「セキスタンド」は
上に撰むへし此「シルケル」は其全度の記号ある全き
復何々を以て其差を確かるの利あり然とも其器重くして
之を廻旋するを容易ならさるを以て其利と之が為
に損せり「ソントサセシルテル」の「フリイクノニウス」を以するは
之を螺旋にて後點 ― 軽く動く輪にて進退する

も隅角を測定するに精細ならす　又「タムブグラス」器名写さく
詳ならすは「ユキセントクリシテイトデルアリダーデ」又測量器名詳ならす
此分教て謬多くあるよりも捨れたり　又「テデウスの場名詳ならす
及「ケイキガラス」テレスコーブ」も測量の時に雲霧気を望む
其善なり敢て之よりは此シルケルを用ゐるとも全く廃すへ
からす是他器の種々害あるを以てなりドグールホルデルも
始に於て専ら此器を用ひたりし其利害を考へ今
クルンと同しくセキスクレーを最良とす但陸地の

測量には半秘なとも詳にするものは「ヘーレン」のシルケルを
用ふへし然とも其器の巧製なる即ち千八百零三
年 享和三年癸亥 に須る「フリーイレグ」ノニウスを附したるを
要とへし
我等好晴に乗して海濱を去る六里より十里の
間よりて北に向て行に海の深さ七十尋より八十尋
廣ハ「ケレイセ」サカリンの海濱は其南側の「バテーレセベー
イ」に並り「アニワ」にも見ゆることなき好景色にて彼数家

及其のクルリケ諸島ハ何連も雪山を見る此外奇き
に山壮麗ハ總て緑色にて中等の高さ程の山海
濱に臨き青々として サガリン中北好景地之とす
遠く望む樹木も高さか濱邊には低き樹
北に見ゆ諸處に小溝曲あり小川流れ出て民居
之て左も好き地と見へさり然とも此に絶て人跡なし
些亞ニ西内地ハ平にして我等之を屋に諸隅より
して渺々之を見ゆさり其隅の一處に一畠平

山中央の陸起きるなり此をチセウ山と名く此ハ北緯五
十度零三分西経二百六十度二十三分ます ビルリニア
スウセン岬より此山に至る海濱ハ北西三十度の筋通
第七月二十日正午ハ北緯四十九度五十七分西経二百
十五度四十八分也北に向て突出さる岬あり リムニキ
岬と名く北緯五十度十一分三十秒西経二百十五度
五十七分ロロとす我より北西三十度に見ゆる地より
壱るは七里海は六十尋なりし處也

皆船の同ハ風吹なかりしか漸く北西風となり甚舶
を衛さる故に已を得す舶をおきり常遣は時々
志ては陸にちかくを二里半或ハ三里除ハ四十尋の處
に及ふ夕五時に風北と東との間北より起り北風尤大
颶何るの兆ともいふ天気俄甚俄く北二十九ドイハと五
より二十九ドイム十五に至る八時より北より大風吹来
たるか十一時まては其風も少しぎよるか次に濃霧と成
暁まて我舶を再陸に向はしめさるか北風漸く

陸にちかき故第七月廿一日午正には　チカラ山ハ我か
北西二十五度　レムニキ岬ハ北西四十六度に見ゆるに川
の口ハ我より西に在我船此時陸より九里を離るる緯四十
九度四十六分三十五秒経二百十五度四十二分ありて南
東の暴風断えなくあれとも我船の測量ニて考ふるに
サアリン北北測ハ四十二度と四十六度此間ニて峡水有て
相別るもの歟其峡ハ北西と南東との間なると思える
レムニキ岬子午六里半にちかき夫より風下に漂て日の

出ニ北岬ハ我船の戌北才ニ当り北岬の後ニ大なる
湾あり此の為ニ瀬濁の留を塞し　主の方ニ延
来りて低くして只連く崖々之を見つし真平なる漂
く陸地ニ入其南北の地ハ共ニ山嶺多し此ニ最好の
谷緑也ニして其国ニ在の山ハ尽く緑林樹をもて繁茂
甚深腹と見へ雪とも少しも園圃の跡あるを見ず浜
に近く鯨魚海馬海物等の多く見え又船の周囲ニ
諸鳥多く飛廻り正午に　二七ム三十　岬ハ壬亥間ニ在

平島の山ハ壬北四八度ニ見る我等ヶ測量ニ此実ハ緯
五十度〇九分〇四秒経二百十五度　五十二分四十秒とす
午後一時ニ瀬を去る　二里余ハ二十二尋之かし陸ニ近き
ニる後風全なきく夫より翌七月三十日　三十一ハ二十一の誤なし　まて
風なし　三十日朝間の徐風を得て船を壬亥間ニ進め
陸を離る　凡五里也　海岸の懸崖甚劇しく其層厳
して閲えたり此海濱を望く全湾地形ー此正午
ハ緯五十度二十二分　二十四秒経二百十五度　五十三分ニ

去て此ニ言く漸く陵遅せる岬なりて船の北西十八度
三十町と見ゆる瀬を離て三里半沖ハ二十七尋底は細砂
ケレイ也我等の北ニ在岬を我船 リユイラナント の名を
以てラトマノフ岬と名く是ハ緯五十度四十八分ロロ経ニ
百十六度ロ六分四十五秒也徐ニ東風吹て船を北ニ向て
進り陸は新ニ連なる山嶺続て顕れ出るも其言
も其形も目ニ留るものなく海岸ハ山嶺陸悪しく色黄也
午後五時ニ陸を離る八里沖二十六尋ニして礁石の

我等考ニ此辺の沖を底地とまて思ヘハ我見ゆる所の北東
岬より一連ニ海中に続きたる礁なるへし然るも此状を
墨り霧深く風ハ東なりしかは夜ニ入て陸より遠ざかり
去りしは其の考を証することを能はす夕六時ニ変晴ニて
マツリ岬我より北西二十三度十四里ニ当る此時我船
北西ニ小湾あるを見る其方置を似て考ニ好港あるへし
其口の幅一里許なりて其中央ニ大礁あり此湾の
因即とす是ハ北緯五十度二十六分三十秒西経二百

十六度ロ八分ロロと云 七時に我等ラトマノッフ岬の
全形を見る此岬の渚に一平なる出崎に突出て其濱
ハ乾の方に延てレムニキ岬よりラトマノッフ岬にて乾の八度
北偏なり何者是り乾の三十度ハ我見る所の最遠に
志て八時に出帆と乾の三十七度に見るラトマノッフ岬は我より
乾の四十三度に在陸より九里十里の離れて深サ五十七尋なりき
此数日潮ハ南に流通我等り船に此一時に一里を流れしとす
此夜針路を北に取帆をおそく行さるに夜一時にラトマノッ

フ岬に回り忘魯に風下に乗り下け翌五ツ時七月廿七日曇
曇り霧多く去地を見すといへとも船を西に向て走らすり
七時に霧濃く復ひ風下に棄て深さ二十五尋の處に至
るに風南東より起りて十時に霧雨霽かゝ乞とおもひ方
雅地方を掩ひ我等速に地方を見んと欲し海の深
を似て考るは陸を離るゝ六七里なる處とす剣るに
霧の霽るを待て少き帆をし西に向て行十時に深
さを見又船上より忽濤を認めり此海濱及其陸地

の高山ハ程霧ニ掩はるゝ迄我等陸を離るゝ僅三里沖ニ
十五尋ニして砂と貝の底地なり卯刻を東ニ向て乗
下り昼午の太陽ニて霧の霽るゝに我船を居る方に引下
アノツフ岬と其北部ニ而時々見ゆる岬並沖ノ陸ニ在所の山
頂の前の両岬同より見ゆるを望ミ得たり我等か経緯
北緯五十一度五分三十七秒西経二百十二度六分三十秒
ニて ラトマノツフ 岬ハ其時我より南地岬ハ南西五十五
度ニ在此岬ハ緯五十一度ロロ三十秒経二百十二度七

分ロロと云此を デ、ヲスレ、テハ六コロイエヒ 岬と名く此人ハ
千七百四十一年 寛政元年己酉 甲比丹 テーンリコフ 亜米利加
航海の時ニ星学士とし往て其行ニ死せし者く陸地ニ
は霧程からまるゝ二時ニ船て晴る方へ行く陸地
向て船を寄三里を離るゝ迄彼ノトマノラ岬 デリスレ岬及ニ
後の山頂を望ミ且海浜を程詳ニ見んと欲せしか霧再
濃く風劇しく東南東より高浪起り亥方より颶風の
来る景色なりしか故船を陸ニ近く置ハ東の大風ニて

岸に赴くべく進て　マルスセイレシを主孫て出さけ甲
宮の方に舶を退けるなり
天氣悪しく濃霧深く至る　廿四日より廿九日に至り我等ハ
五晝夜一勝陸地を見ること能はず此海深淺極
而砂洲あるを知らさるにはかかる天氣にては實に我等
多く憂困する所なるべし　廿八日に到りて霧晴れ遂に又陸
地を見ることを得　前日の乾針方まで我舶陸を離るること二十
五里なり　此日夕方に再びデリスレ岬及北に近き

高峰を望み見ゆ　此處まで　サカリンの多山の地ハ絶り
たりと見ゆ　何もの此岬より北にハ二ツの大岡の北に向て
出るあるを見るのみにて山もなし　只全く平坦にして
林叢を擁び眞に砂地也　ラペロウセを　サハリン西側を
觀して　五十一度の地ハ砂山より他なしとす　サハリンの此
地東より西に至り五十里程に過す　五十一度より五
十二度の間砂山あるより他なしとするを知る
第七月廿九日天氣好晴にして韃靼間の微風を得て此海ハ

を粉捻查せんと舶を止め午正に舶ハ経二百十六度
〇七分緯五十一度十四分四十四秒也三時に陸に近く
七里添三十尋底ハケレイ也予舶を北に進め漸に
陸を望むに此海濱ハ土壹より土にむり子に立り路
に接て濵に舶ヲ陸り近き三里事て到る此間ハ不
詳見へるハ北ヤハリシは其緯五十四度に在へし而して予
今濵に沿行く所の首なる所を別に此と二島に別ち
たるに非し今此に見る所即南の終なるへし

午後四時乾に当て一高地を見る所海中北に一島の
如く然り其陸添くハ居く嶮嶪にて遠なるに掩ひたり
予思に此乾に在る高地はラベロウセのホウチン岬なるもの
在る所なるへしと夕入時まて沙濵の端と見ゆる一端を
是ハ我より乾の二十度に在て圓なる北園と見え其地
とす其緯五十一度五十三分〇〇経二百十六度四十
六分三十秒とすこれ此をドイ子と端と名く此端にて沙濵
北限を着す此より北に進みて南と同しく只此端の

後ニ深濤あり第七月二十日の暁ドイ子ル獨ハ我ら
未の二十里ニ在ラ邪思ふニ此濤中ニては此島の分別を為
すや之を樣んと欲坤の方も舶を遣る風南西より
起り舶を戌辛間り送る然とも我等已ニ陸ニ近く
十分ニ此濤を見扨さるなり 我等八時ニ乾の方り
大地あるを見さりしか此ニて桅上より之を屡ニ見るを
南陸ニ近く至ニ十里許ニして深十七尋也後五尋ニ至り
一時許を過て桅上より初て土地を見 夫より次て舶

屡上ニて之を見し 跡生
正午ニ我等乾の方ニ圓山の一并岐濤の形のめく一連乃
諸島のめく廣漠中ニ殿すを見る其濱北より東ノ濱の
めく平ニして總ニ水面ニ陸起する之總て沙濱ニて陸より
深く穢樹林を見遠とありし 戌の方ニ一の沙堆の傍ニ寄するを 真察
向り北正午ハ我等ハ緯度二十一度十七分二十九秒経二百
度四十一分とす濱を距五里半深十七尋向り 羅針の差は
或ハ一度東ニ差え或ハ一度西差と為る蓋の驗ニ之を折中して

零ハ度五十七分北西岸と云
午正已後海汐漸々に減りて我止事を得ず船を浜
より遠ざけ午後五時に已に陸を距九里と云其汐
十尋なり予船の両側より稍々之を測るに八尋と成
忽五尋と成又四尋に成り是より再其汐漸く
増す此海浜の浅きハ之を測る事かたく実に危し
然れども其八尋より忽五尋と成変ハ北緯五十二度三
十分西経二百十六度三十一分日より陸を距十里

未其南北数里の間無し嘗此浅所に到る前月
経度を測りて五週中にて良験を得て経ハ度の測式
午正に平均し其経二百十六度三十九分十秒と一
正に時計の見ます所に符合すと伊子ノ隅の浜の方
角ハ全く北に向ひて彼浅所の節に当て東に向ふ
是出ざる一隅を見る其ハ角も殆北向にして大概
如く平低にて緑樹林あり此浜に所にて彼此に岡阜
あり其ハ是出ざる隅ハ之れにそむき浅所に関て著し

とす其邊ハ即此を浅瀬の岬ランジーブテ岬と名く此ハ北緯五十二
二度三十二分三十秒西経一百十六度四十五分三十秒
とす平低の瀬に一叢の園を得て我故に山の名を以て
呼て人をして容易に之を認め志むへしとす
此洲瀬は我船已に退屈せしる程なく北に岳
さり唯廿八リの遙かの東を見ると何分にと彩ふ而
已日の西に崖る時其ハ北东に二ツの陸地を顕る園を胸
北西に見る即其ハ緯五十二度四十二分三十秒なりとす

其邪ハ北に向て日に留るもの無し只ハ平坦なる邊ハ洲瀬
然るに九時に風ヤに棄けさり此れ九日三十日の
内に殆八十里の長此退屈なる海瀬を無過しり只
好天氣にて毎に六七里も陸に近くに相陸を見ざる
事有り兩日好晴なる後見て天氣の変あへき
を察して不崇して一時風なく霧深くなり第七
月三十一日は終日全く陸を見ること無く第八月一日の朝
潮しきて东に風吹起り此時深二十尋にて東邊はいまだ

遠く岸を離れしを見退帆数を増して風下に走り
此危き海濱をさけぬ正午にも風强けし
かりしり舶已に五十尋の深處に至り夕には又八十
尋と成る夜中に風に乗じ走り第八月二日朝風雲
卯此風にて正しく西に走り陸に向ふに午後二時より
陸をも見得しに其地甚高からずといへども南に見し地よ
ハ高し又北にも向て遠く雪の眼に觸るものあり此海濱
と圓頂の山あるを見る三時我等陸をも見失ひける後

是ハ乾の六十度に在其後陸より離る九里深さ六十
八尋なりし此午正ハ緯五十二度二十八分四十秒經二
百十六度十八分とす此由て第七月三十日我見し
緯五十二度四十三分三十秒なる圓より八四十五里せる
里とす此方隅を考合すれハ宛も鞭楹の處まで至る
（相合せるの後）
陸とし此を名てサーンンフーギレク此圓と名く亦其處に
舶をとまる前に我針路を西にし此に見出さる地尖とを
浪に在山との間に頗大なる湾あるを探る是サハクン

北場り好港を見出し其處ニ碇をおろさんと思ふに四
時半ニ至り其地も低き濱ニて砂洲を以て成るものにて此處
懸浪甚しく打かけ彼處ニ宿る事の湾口ニ大ニ濤を成て満
つ是故ニ再び針路を坤ニ向け陸へ八ケ科ニ近て全平
低の地なり然るニ湾をも向ふもす低き地の間ニ甚だ高
さる地尖數多ありて然るとも此ニたる事三里許ニ高
然て其地を見るに濱ハ總て懸浪甚しく處々に披き岳の如
起地海濱より高くして此ニ遠く時ハ深く直ニ識す是哉

仍て我等は時に針路を坤より乙ニ轉し七八里陸より遠く
然とも濱ニ一隅の紀すへきを見得中等の北風も南風の
海ニ至て船の至ハ速船運は日入の前にサーンレツクウヰヤンク岡を
見へ至の岳を磨得直後五時ニ申ニ南ニ至て陸ニ深く
著しき高申部及七時に又一ツの高處を夫より南ニ見
又一隅の濱の方置より西船を見出より其隅を繹
南緯十二度五十七分三十秒經二百十二度四十二分三十秒ニ在
印我好友政卿ウヲルストの名を以て此ニ命名し八時ニサンン

ソウギング岬を分明に見付たるに是我等か為に緊要
北一點とす何者乃我等作る所上一点の変差を
見んと思遣さきく今此変に中て此合海濱を收結
せる事をはかると也 我等 サーソンフウギンク岡の節より
十九里を経る此十九里を分て八第七月二十日夕に
見し時此岡は西に在て北に九里半あり第八月
二日には九里半南に見えたる也此にて其変の我等か為
に緊要となる事を知へし

此て我等時々針路を坤より己に寄し一七八里陸より遠く
然とも濱に一隅の絶すへきを見ゆ中等の北風も南流の
激にて船の之を八速(風速)は日入の前にサーソンレソウギンク岡を
見へき所を慶に宣度五時に中に南陸に添く
著しき高き変及其時に又一ツの高き変を夫より南に見
又一隅の濱の方置より西のを見ぬより此隅に緯
度二十二度五十七分三十秒經二百十六度四十二分三十秒に在
而我好友政卿ウヲルストの名を以て此に命せし八時にサメン

ソウギンク界を分明に見付さるに是我等ヵ為に緊要
此一點とす何者ヿ我等作る星上一盤の空處を生
せんと志さゞるヵ今此處に由て此全海濤を收拾
せる事を得さる之我等ザーメンフウギンク圏の節ゟ
十九里を離る此十九里を分て八分筭七月三十日夕に
見ヿ時此圏ゟ西に在て北に九里半あらし筭八月
二日に至は九里半南に見さる此ゟて此處の我等ヵ為
に緊要とするを知へし

注此距離ハ約二里を減せるなりヿ計誤を生す
と追めに此圏已に我西に在也
此後夜及翌八月二日も風強く霧深かりしヵ此日正夜
正時急晴て午正の測を得るに北緯五十三度五十六分
四五秒西経二百十七度四十五分とす潮流に由て我
船南に流るゝと二十里なるを知りぬ
夜に入て微弱なる南風を得たり 我等已に此海濱は
第三度三十分に至るを測り達は遠く北方の深さを

以て再ひ船を北の方へ追ひぬ東に帆を上けて十一日の間と云ふ
にも至る正午に霧晴て測量するに北緯五十三度甲
四分二十五秒西経二百十六度十三分とす此にて又潮流
にて船を流す事丑方に十里余を知る是故に船我
坤の方に遣りて再ひ東の方へ向て一隅點を得んと欲する二時
乃陸を見出す同時に三十五尋程深中にて浜に至る七里
に及ふ中思ふに彼八月二日に見し時は圓頂の山の北に
在と云ふ今は我より庚申閣に在るの如くされる地

其後は海湾あらんと思ふ地場は坤方に在圓頂山の北
に向ひ形北浜あり其浜中程の方にして然も平地
にて其前に名平静の海浜あり此に数多地尖あり
互に相連り其距る所を知るといへとも此に湾を成す所
なきへしと察す其一地尖北に長く延ひたる後に源
く内に入る瀬あり是路に陸の未合なる所
あり是一河の口なるへし其地尖は緯五十三度四十分
経二百十二度五十三分とす此尖を我友[illegible]

ロカツエフ北岩を以て名く
羅針盤を乾と亥の方に変して船を続て往き
陸地を見るに五時には霧又深く更に陸地を見す船
舶を乗下け又海浜より遠く離れ去る也未た何の
風浪も成さす空曇り朦朧と北に戻し間の風を待り
霧深く北より四ヶ間続て艮に我船を六度
に遠り北に西り全く海浜を離れ去るや益々海深
七十二尋有るは我最早く陸を離れ去りて大八里

或二十里の距離にて有之候へ八月八日に霧晴て晴て平野
島に坤より乾に引直しさり陸地を見さり我船既
二七値の間北に沢ひく只一平沙の海浜に非す一章
地高く多山中にて其浜は多く八礁石出て岸にケレイ
に岬ありて磯あり山の間には低き処もあり乾に当て大昭
岬あり其浜は多く西に向て延さり北岬を我船の第三
リユイテナントの名に足てローウユンステルレ岬と名く緯五
十四度三分十五秒経二百十六度四十分三十秒とす

此岬の前に一大礁を置く
此淺と前に離れ晴て初て見し所の間に一の海灣
皆有り之を尋るに南に遁るゝを二十里許にして
其際極を見るへし然るに風乾より強く吹て墨
離深く我船止るを得す坤の方右に退事十八
里許八時に再彼陸地を見即我針路を北東て
陸を離るゝ三里餘深二十五尋の處に至る ロウエンステ
ル岬の方於四度の地尖有り皆に サハリンの北岬を見

べーと思ふる ロウエンステルレ岬の南に濱に至く好合有り
山にて周より此より一川流て海に落又此合に遠
からさる所に地尖の間に一の灣出あり然とも儀さ
地尖にて相連り其淺なるへしと思ふに其望僻て
と消よる ロウエンステルン岬の北は此島の最後濱に
至り全勝膨として少し緑色有るを見す此全濱は
黒色にして白點有り礁にて有り陸を
離る三里にして深さ三十尋礁石の海底也此離

距りて ロヲエンステルン岬より サハリンの北岬まて乾の方三
十五度にまて 船を進るに終に朝十時に北岬を二十五
里の距まて見出より 然とも皆ハ其緯度を測ると
能す依て 昼午の前一時空曇り雨脈く降て全陸
地を見す 其距ハ僅三里まて深二十五尋也此辺にして海
水の色変して汚濁なる黄色となる トクテルホルネル之
を論せるに昨より ハシケレイン 軽とす是ハ此より一度
半南に在 アモル 河口の水に因て然らしむるへき書に復

一時に空晴 サカリン 北北岬ハ我より南に当り ロヲエレス
テルン岬ハ巽の五度に在深五十五尋にて底ハ砂石
なり 巽の強風にて空晴と霧か兎角我船 サハリ 北の
岬を乗通て暮夜三時半に北岬ハ我より南東に在其時に
高き陸地の岬の方に近くるを望む空曇りて其北の辺
を望く極る事能ざる故にすらに船を北隅にて一大湾
を知きるなるへし岬の方地高といへとも遠くも少し浪も
間に大風吹出 船 帆を困めて乗下け北風にて脈く

陸の方に吹き海の浪漸くに減し速ハ夜に入てハ
陸より多く離るへしと用意ある処
第八月九日暁に中等の東風にて船の諸帆を揚て坤の方
に走る北方にサハリン北北岬見へしとす九時に陸を見
るハ是ハ昨日霧にて北内に見へさるサハリン北隅の坤に在し
浜なり十時に此隅を我より其の西半二合に見へサカリン
北北岬ハ日時より坤の五段に見へる此時船ハ浜より十
里の距にて深さ二十四尋底ハ沙地なり

サカリン北浜に此二岬を見出し一を五里サハトス又一を
マリカ北名を令す此二名ハ魯西亜人の最貴重なる
取かして国よ好要を得し之に名けんと欲せしなり訓
リサベト岬ハ北緯五十四度二十四分三十秒西経二百
十七度十三分二十秒に在此岬ハ高峻の嶮巌にして
一連山嶽の絶端にして多く尖り諸山の内比り全く
裸種にて樹も草も外く海に向て漸々に険なく下
り其頂て雲に高く小なる峻峰あり其後の雲に

中等の高き嶺なりて小嶺ニて之を続ぐ此岬
を西より望めは カムサツカ地角隅ロバトカ岬ニ似たる
此ハ彼より高とす 此岬の西ニ一尖山の麓なりて
其間ニ小湾なり マリア岬ハ緯五十四度十七分三十
秒経二百十七度四十二分十五秒ニ在 エリサベト岬ヨ
早く此ハ一連の岡阜なし 高き所より起て海ニ
向て漸く傾き低く終ニ浅礁となりて海中ニ流
出此ニ海湾劇しく激湍あるも此礁石の水中

ニ甚しく延蔓しなりと云ふ 此岬の尖（尖）は激動甚急ニ
して反（反）て流れ風向迄は其勢を減す 此岬ニ近くハ
舶の為に甚危とす 若風怒然として乾となるハ太ニ
危をし彼暗礁の水中ニ隠出する限も之迄かきる迄
ハ危険し此ニ近迄て避からすとは
エリサベトとマリア両岬の間ニ太ニして深き海湾
有り其地湾ニ臨て高かれ依の岸ニ寄りては甚低く
此ニ好港有べし 尚此舶を此湾ニ来ニ陸ニ近く有の

里て之をこゝに港ありと云ふ然とも其東西濱に一山の
林莽に分行りて其内に大なる村あり我等其處に廿
七家の在を数ふ其地景甚好しと見ゆ此中にて殊に十
一並に三十五人の居るを見る我等パナインセ湾を
去てより見る所のサカリン土人の最多なりとす是に
於てアリリユイラナント ロウエンステルンを陸に遣りて其人及
其土の趣を探らしむ即ロウエンステルンに喝おりて陸に上て
全く濱を離るへからざる彼土人女も見えぬ此哉其の氣色厚ら

尤速に船より出来る／＼ドクテル ホル子ル及ケンシウスも
ほしく伴ひ行かんことに二時に小舟を送り出し我船は陸
に近く一里半の距に在濵は七尋ずに至る半時許にして
小舟は彼村のある濱に着す此舟の陸につく時に至
り舟と陸方との様子を見んとするに我方の諸人彼土人に対
て敵の氣色あるも見えず又相親むの有様も却て濱に
其の小舟は船に返り来り彼土のことを告て云彼土人の
内の跣足損ずして衣服たよしとなんするもの三人有て

小舟の彼ニ近よると直ニ各手ニ獺皮を取て氣筆
に振り動し且高聲ニて呼りしると我等の人の漢
ニ上りきて陸ニ入んとするを彼等ハ拒むと見へ村中より
衆多出来りて皆短劍を持てるものハ刀を取て敵
さんとする風情なりしはさて終ニ小舟ニ乗り退しと也
但此湾の一方彼等北の處ニ上陸して見るに
小さき島の後ニ大なる沼有て深く陸地ニ入たりと見ゆる
有と又ロウエビステルニ云彼土人ニ對して彼等と見しニ彼等

八今サカリン南方北土人アイノとは別種と見え
其頭ならびに言者ハ毛浸付の皆の服を忘し其他衆人
も皆の上衣を服しさり居する事ニ是ハ韃靼の種類ニて
有之し
魯西亜国人サカリン北部ニ一要處を置んと欲せハ
此海湾ハ其要ニ應すときん此湾ハ甚大開けたるとも
常ニ考ニはテチリシハ及マテイラ此湾ニ勝りて時節
を見てハ此ニ大舶も危難なく碇泊ニ成へしとす此湾の

沖ハ既ニ上ニ云如く陸より一里斗の距ハ九尋の海ニて底
は細砂有り 此より陸ニ近く漸々深を減し
の距ニても猶三尋の深有りて底も堅するによりと
此夏時ハ北風締りして舶を此ニ置も全く安穏なるへし
此湾ハ艮より乾ニ至て全く開き濱ニ歩も激浪なく
我より遣りとる小舟も容易ニ濱ニ着きしと共ニ周
ミ言港ニて舟を岸ニ附ルニ異なる尤其月ハ北風の歩
きる事ハ甚甚 此後 サカリ 北濱ニ泥て往来きし内守

八月二日 北外ハ猶吹さる北風ニ逢る事ありし 其内此ニ多く
吹く風ハ巽より乾ニ至ての間なり 艮及北より潮流急き
時も湾の開きし為ニ舶をまた把り出すニ難からん 彼村の
在し谷ハ収税聴を置の處ニ至りしとする 總て此地ハ好景
中ニて壁葉縁ニ繋り 四圍北山ニハ好き松林ニて掩ひ
とり此ニ嫩く多くの小川の流入 沼有 舶の為ニ薪水を
取ニ勝れ 此ニ封し 西濱の小湾ハ陸地ニ童の距と
此又 マリア 岬ニ近く 別ニ一小村有り 此家の難ニ観人

ハ國より本土の人に非す是ハ土人アイノを逐して
彼韃靼人此に住むと云事しれさへし彼二卯の間此
少てレンデシ此羣生牧するを見んし終なく化定り
好田畑の利を得ふし
此湾ハ東はエリサベト岬西はエリア岬を以て囲むを
此をイルテルバァーイの義 北湾と名く其濶ハ艮より坤方六
十五度に近て十八里許り韃靼人の居住する谷は
湾内の地にてエリサベト岬より西三里許にて北緯五十

四度十五分四十五秒西経二百十七度二十三分〇〇に在其
處より廿の離れて其地三ツ島此如し其間に港右へく
見ゆるに因て是を此目印とす我等マリア岬より
近つきて新月と満月此潮の高を試とし其潮此
外の事我等知り難かりし也
予元此湾に復き一時陸の事をも委く探らんと思ひしが冬の氣
悪き後今日の美日頃ハ離悪きサカリン北西側を點記せ
むと欲し且此好港をも見ん事ゆゑ人と達さ遂に此湾は出帆せしむ

ロウエンステルン既に舩を返して本の道に小舩を引上け諸帆を
張てマリア岬を兼て過んとす此湊を出しは海の深漸く増へ舟
より十六時を過マリア岬の東を廻ると忽ち四十八尋となる
深より六七里の距八時に風ハ順なれとも舶の舵きかすめ
たりと云是ハ潮流の甚剛しきに因て斯る潮ハ東北隅に
向ひ流る夜二時に至りして甲寅間の流となる此時風ハ同
く張く吹より然とも舵のきかさる故に唯潮に任せて舩をき
より此時の力を試んと欲し朝十一時に小舟を下し

之を舶に添て稜をしめさるに潮勢一時に二里半と流し
たり此故も潮流ほしく張く昼夜書夜二十五尋底ハ細
沙北変に舶を稜きに其時アリサベト岬ハ羅盤の方置
に巽の七十九度アリア岬ハ巽の三十一度又北北西側の
新ホ見村よりる渕ホルネル岬と名くハ巽の二十八度に当
舶在北緯五十也度三十分〇〇二秒西経時規に従て
二百十七度五十五分とす二時に良の風起り此風
ニて直に帆をとまり舶をマリア岬に向ましむ夜に入る事

風巽に吹て翌日も同し風にて強く雨を催し終日
太陽を見ざれば北に出て止事を得ず船を「サガリント」と韃
靼との間なる峡中に向てまぎれたる須臾を見る
事なし 此の際ハ二十二尋と二十七尋の間にて潮流
も不断に南し行なり 夜に入て風弱り静かに成
第八月十二日 即北翌日十時にて船を潮に任せ置き
時々風も吹来れども北潮にて帆もきかず止るを得す
亥中甲寅に向ふべき船を辰の方に流し午後五時に

始て其ハ針路に向ふを找得たり 北濱の方四里を考ふり
「ホル子ル」岬の後ロは好き湊あるへし 思て陸に近く一里
半に至り又西北に其處は僅に陸の方に入込さる一湾に
湊を発し北に向ひ後第八月十四日北處に碇し右は
北午正の測に緯五十四度零四分十秒西経一百十七
度五十一分三十秒にて量程車より三十二里北なり
東に当て高峰に向ひて其地の中央に在るを見る其南
高山に向て二嶺に別れり 此時「マリア」岬ハ艮の二十八度

其南端の地我より東ニ見へ高峯ハ我船の碇泊所ニ於て
エスペンベルク山峯と名く緯五十四度二分十秒経二百十七度
十分ロロとす
ホルチル北海峡ニ入て海水を試むに其比較の重さ唯
七十八ゲレインニして即中等緯度の海水より十二ゲレイ
ンを軽とし河水よりハ十四ゲレイン重とす北ニ向て
アモル河口の北ニ近き我泊船を濱ニ向て其を一
里より二里北隔れ迄も河口なるへき處を見る

深八十四尋より十二尋也
サカリン北北西濱ハ東南濱ニ勝ると見へ山の間
ハ茂林ニして山頂まて續谷ハ緑色ニして耕鋤き
と見へ又濱ハ多く礁石ニて黄色ニ見へ堤塘ニて囲
く如し其内處ハ低くして山岸の缺たる處ハ皆人家の在
と見へ其處ニ或小船を繋き或魚を干棚掛見へ
南ニ運上所と見へ而て陸ニ入て大成材屋あり小耕地
も所々ニ圍圃もあり其土人今もアイノより八風俗

是より西其ハ高き地と早地の境ハ東側数山より此浅瀬
続けりハ総て浅瀬にて遠くまて岡に廻り数丈あり
浅堆あり東側に見しが如し其ハ浅堆之を屋に雲の如く
取置高低相交り見え之を観に落石大城基の如く此浅
瀬の傍ハ海深漸く減して我船八里半或八里の点ハ
至つて少に及て壬亥間より風あり北風ハ正く海
峡に入る時に俄にして浅瀬平にして漸く遥に西に廻て
瀬に泥ふの針路己に坤に向ふ是に於て我船風に順

ふを止め横に海峡を西するに此地の碍を昔ハ荒り
見しに高阜にして海中に特峙も遥に是から見ゆ
高き柱立を見る様なり
築八月十三日暁に諸帆を張て先其方に向て進て此方
に高き地を離し八時に針路を丁方に転して進て昨
夕見し所の浅瀬を去て見る大より其ハ変して漸く西方
に在る十二時に申より酉に直りて高き島山の地をミ
る窮に掩ひ　にては是亀甑の浅瀬殆と一其多

山の地の端ニ至陸ニ接ク二ツとサカリン満との間五里許の
海何ぬをいふ是ハ北海峡のアモル河口を過すもの
ある事を知る我等其海口より船五里許離れ達ス
其深さ已ニ六尋ニ至り有退ば敵て船を進め得ず此
小船を棄下し弖ベルクニ命して小舟を先サカリン
北隅ニ寄三尋の変まて至り夫より相對せる韃
靼の濱の岬ニ寄せ此海口の全幅を測らしむ彼船
より離れて二時の間已ニ眼中ニ失し合図打て

之を告ニ其ニ多ニ時ニ返り来る弖ベルグ云小舟を出
せし所ニ関接潮南より流れて三尋の変まて急ニ近
く至能ハス其幸ニ海口を測る時を過ぎたり
と彼サガレン北濱より四尋ニ北深ニ至る此変韃靼濱
との中央ニて両方ニ二里程あり夫より韃靼の濱り
向ふニ始めて後ニ三尋ほと来る其変ニて合図の
音聞て小舟を返し遂ニ彼海口の中央の水一桶を
汲来り是ニ九全淡水ニして其ま々我船ニ貯ふべし

トペテルヱンバウルの水より僅一ゲレインまく長崎の水
と同量なりし我等又舶の傍なる水を汲て試に塩気
甚少て飲用さるに堪たり且其潮流南及西より
強く北并東に趨く アモル河ハ韃靼須の
遠くた海に入要河あるへし 岬り
北海口を作り両地尖を我舶の第二第三のリユイテナ
ントの名を以て命す其西なる韃靼濱ハロムベルク岬と
す北緯五十三度二十分三十秒西経二百十八度十

五分十五秒其東なるサカリン濱はコロツツエフ岬とす北緯
五十三度三十分十五秒西経二百十八度〇五分〇〇とす
かくて小舟を舶に取合と直に針路を韃靼濱に向
け進り日の入に此に至く六里に至り深ハ九尋十
尋なり ロムベルク岬の東北に小島一ツと其北岬に乾にたる
出さる低き濱地あり其低平八平低なる濱に或
小島の連なるあり又或一ツ中者大なる島にて北にて
海口の地を別つものなるなり難し

八時より九尋半の深さに至る コロフスツエフ岬ハ我より坤の五
十五度にロムベルグ岬ハ坤の五度韃靼濱の北端ハ乾北
五十三度にあたる 是はカバロツプ岬と名く北緯五十三度
三十八分〇〇西経二百十八度三十四分〇〇とす 此岩ハ
千六百四十九年 後安二自ら費を出して危険を冒
志て始て此地のアモル河を見出せる魯西亜人也
此夜風異に四更て暁に至 諸帆を張て韃靼濱にて
海峡を出るに潮流南よりもはげしく風も強く帆

而も何遍ともに船ハ乾に多く痕中同に少く起きかく
風を帆とすて七コノフ北連けれども船ハ二時を費さり
終に潮流劇にようて西に進れ 折八六時に針路
宗に向て サカリン北西隅に進んと志て見し 大いなる
村河ある湾中に入て 碇ー サカリン北北部を押廻さ
韃靼人の事を審にせんと欲す 夕六時に九尋の深
進少き處に碇を須淵より 一里の距離